

魔鏡とよばれる謎の鏡… 三角縁神獣鏡

弥生時代中期・後期の集落跡を破壊して造られた水堂古墳からは、三角縁神獣鏡（さんかくえん・さんかくぶち しんじゅうきょう）が出土します。（右写真）三角縁神獣鏡は、鏡の縁が三角形のように切り立っていて、背面の模様「神と獣」が刻まれています。概ね直径が23cm前後で、鏡面がゆるやかな丘のように曲線的に盛り上がっています。この鏡は全国各地の古墳から出土し、500枚余りが確認されています。水堂古墳のものは、奈良県天理市黒塚古墳・京都府城陽市芝ヶ原11号墳・神戸市西求塚古墳出土鏡と同型鏡で、「東王父、西王母、傘松形」の神像や「東：青龍、西：白虎、南：朱雀、北：玄武」の神獣が見受けられます。



三角縁神獣鏡は、卑弥呼が中国・魏に使いを送った「景初三年」（239年）を銘文に持つ鏡があるため、魏から贈られた鏡との説もある一方、中国では1枚も出土していないことから国産説も根強くあります。なお、2015年に中国の骨董市（こっとういち＝昔のものを売り買いする市場）で三角縁神獣鏡が発見されたという報告がなされ、これが中国の出土鏡になる可能性もあります。また、2014年3Dプリンターを使用して、東之宮古墳から出土した三角縁神獣鏡の複製品を作成して実験したところ、鏡の背面に刻んだ文様が浮かび上がる魔鏡の現象が確認できたと、京都国立博物館が発表しました。三角縁神獣鏡は謎に満ちた神秘的な鏡です。参考資料 apedia「水堂古墳」 Wikipedia「三角縁神獣鏡」

水堂古墳 三角縁神獣鏡

